

## 昭和二十七年

### 恍として日輪冬の瀬を渡る

読みⅡこうとて にちりんふゆの せをわたる

季語Ⅱ冬(夏)

恍としては、うっとり、ぼんやりの意味。瀬は場所、川の渡る所。この場合固くいうと、太陽が通る黄道。

風が無く、もやが懸かったような冬の日太陽が空の決められた道を渡るように回って行く。

この句も

『山國の虚空日渡る冬至かな／蛇笏』を意識していそうである。

### 風花や唳々とひく獅子の笛

読みⅡかざばなや ろうろうとひく ししのふえ

季語Ⅱ獅子の笛(新年)Ⅱ季違い

甲州の冬は寒いが雪の日は少ない。日本海側大荒れ、という冬型気圧配置になると、強い北風が吹き、晴れた空に風花が舞う。

晴れた正月の風景である。獅子舞は青年団が主催して各家を回った。あまりにしつこく脅迫的な獅子舞の年もあり、子供が恐怖で固まったり、夜中にうなされたり、と後で物議をかました事もあった。

### 突き崩す櫓の年輪雪降り

読みⅡつきくずす ほたのねんりん ゆきふれり

季語Ⅱ雪(冬)

### 饒舌の婦が去る軒の雪しづる

読みⅡじょうぜつの ふがさるのきの ゆきしづる

季語Ⅱ雪(冬)

しづる、という言葉は古語辞典にもない。どこかの古典に埋もれているか、はたまた造語か。

し垂るⅡしだる、はしだれ桜というような例もあり、しだるなら垂れさがると言う意味で、つららなのか、と思うが饒舌の婦によって浪費させられた時間を表わすには軒の雪を解かしたい。

しづ、には下という意味もありそうなので、滴ると解釈しても無理はないか?。とにかく、辞書にもない言葉を使われると、解釈に困る。

この饒舌の婦、に心当たりが何人かいないでもない。ま、甲州の婦人は、まずは気が利いてまめな手八丁であるが、口八丁でもあるのである。

### 娶る人逃く人峽の冬深し

読みⅡめとるひと ぬくひとかひの ふゆふかし

季語Ⅱ冬深し(冬)

娶るには妻を娶る以外の意味は無いので、ここで妻を娶って住みつく人、逃く人は、この村での生活を終え、村を去る人の意味。この時代だと次三男には仕事が無く、近隣農家に婿に入るか、都会に出るかであった。

### 観相の灯も如月のうるほいに

読みⅡかんそうの ひもきさらぎの うるほいに

季語Ⅱ如月(春)

二月では夜はまだ猛烈に寒いのであるが、二月の声を聞くと一月とは別の華やぎを感じる。観相すなわち辻占師も寒いであろうが二月の声を聞く

とその灯りが春めいて見える。  
観相などは坂井の村は勿論、葦崎にもいなかったであろうから甲府の夜の風景であろう。帰りはどうしたのか心配になる。

## 梅かほり軍鶏夕光（カゲ）を曳き歩む

読みⅡうめかほり しゃもゆうかげを ひきあゆむ

季語Ⅱ梅（春）

軍鶏を家で飼ったと言う話は聞いた事が無いが、近所あるいは、親戚の家などでは飼った事があるのかもしれない。勿論、食用である。

いずれ食われる身とは夢にも思わず、軍鶏の雄鶏が満開の梅の木の下を悠然と歩いている。

## 雪積む木音をひそめて暮れ急ぐ

読みⅡゆきつむき おとをひそめて くれいそぐ  
季語Ⅱ雪（冬）



### 雪景色二題。

上は縁側から錠口（道路からの入り口）を見ている。左から画面に入ってきているいる木は今もシンボル・ツリーの木犀。その下、錠口脇左の四角いのは杉の生垣。生垣の内側にゴールデンデリシヤス種の林檎の木が一本あったのが写っている。その向こうの畑の中の小屋は鶏小屋で、現在も土台が残っている。画面右の木は梅の木で、中梅と呼んでいたおおぶりの実が生ったが、今は枯れてしまっていて無い。その下の四角は山の落葉などを集めて囲っておく場所。それに被って画面中央右端に今は背を低くした杉の生け垣が見える。遠景は、雪で霞んでいるのであって、当時家が一軒も無かったと言う訳ではない。

下は家の東側から見た榮助の雪かき姿。雪が着いた木は全て柿の木である。榮助の左手、現在は作業小屋Ⅱ旧蚕室は、当時「隣屋敷」と呼んでいた畑で、麦、トウモロコシ、野菜などを植えた。榮助の左手後方の四角いものは杉の生け垣とそれに続く板塀、その手前は「甘百」という甘柿の木。

甘百は甘い百奴柿という意味であろう大きな甘柿で、中ると旨い柿であるが、往々にして渋い実があり、他所様に差し上げるには危険な柿であった。右手の一段低い畑の中に鶏小屋が見える。

雪かきはそれぞれの家の屋敷の前を責任範囲として、前の道路を最低人が通れるようにする。

志村家は『隣屋敷』も含めてその責任範囲が広く、余所の三〜四倍はあるので雪かきは大変である。

## 荒神の注連シメなおしろき追儼ウツの爐

読み〓〓こうじんの しめななおしろき ついななのろ

季語〓追儼(春)

追儼(ついな)は、宮中行事で、鬼を払う儀式。節分の元になった。

荒神様は、火、竈の神様で、当時は、竈の上に祀ってあった。その名の通り、荒ぶる神、祟る神で、ゆめおろそかにしてはならない。お供えの餅は他の神様より一段多い三段重ねと決まっていた。

お正月に張った注連縄もまだ新しい節分の頃である。

## 風荒ぶ山に聴きとむ彼岸鐘

読み〓〓かぜすきぶ やまにききとむ ひがんかね

季語〓彼岸(春)

彼岸である。この風が日本海低気圧による南風なのか、名残りの寒波の北風なのか、迷うところであるが、黙祭の感覚ではこれは南風である。埃を含んだ生暖かい風が吹き荒んでい中、どこかで撞く鐘の音がする。黙祭はこの頃すでにかなり耳が遠かったはずなので、本当に聞こえていたのか、想像なのか。

## 水温み健康に夜々寝溺るる

読み〓〓みずぬるみ けんこうによよ ねおぼるる

季語〓水温み(春)

エロチシズムを感じる句である。

## 燕来る機織る母が老いゆく櫛

読み〓〓つばめくる はたおるははが おいゆくき

季語〓燕(夏)

母とは、はつの事である。老いゆくと言っているが、この頃はつは六十歳位の筈である。老いゆくと云う歳でもなからうにと思ふ。

『織り励む姑の箴音麦を踏む／黙祭』  
ハハ ハタオト

これは、昭和二十二年の句であるが、随分と調子が違う。五年の間に機織りの音も老いたのであろうか。はつはこの後十年もしないで病気で逝くことになるので、老いも早かったのかもしれない。家族の感覚としての判断であるが、この二句は数メートルとは離れていない同じ場所で作られたものである。

はつの機織りは、繭を煮て糸を取るところから始まった。繭の糸口をひっかけるには、卵の花のざらざらの葉っぱが最適で、よく学校の帰りに採って来るよう命じられた。染色はどこかに依頼したのか、糸を染めたという話は聞かないし、見た事も無い。

染めた糸は完成品を予測して組み合わせさせて縦糸として機織り機にセットし、横糸は手動の杼(シヤトル)に仕込まれた糸巻きにセットして、足踏みで交差させた縦糸の間を通した。杼を通す(カラリ)と、縦糸全部をカバーしている巨大な櫛のような道具で横糸を詰める(トントン)。織った布

は「内織り」として、一寸他所行ききの着物、上等の半纏などになった。家内は結婚して初めての冬、ゆりが作ってくれた、はつ婆さん内織生地の綿入れ半纏を持っている。

蛇笏師は雪隠でよく読書をされるとか

## 師に倣う古き雪隠竹の秋

読みⅡしにならう ふるきせつちん たけのあき

季語Ⅱ竹の秋(春)

蛇笏にこんな習慣があつて、その成果としての雪隠での読書の句があるかどうかは判らないが、この時代の黙榮がそういうのだから、そういう習慣があつたのであろう。日本文学史上のトリビアと言えるであらう。

この古き雪隠は陶器類一切無しの全木製で、「四角くって汚い」金隠しが付いていた。従つて落語の「大工調べ」で政五郎の、ケチで金に汚く、物事に融通も利かない大家への悪態「この金隠しっ」も一発で理解できた。

## 野は花菜不具の娘縁を得て去れる

読みⅡのははなな ふぐのこえんを えてされる

季語Ⅱ花菜(春)

近所の娘さんがお嫁にいったのであろう。幸多かれと祈る。

## 野外蚕に明けの月光霜のごと

読みⅡやがいこに あけのげっこう しものごと

季語Ⅱ蚕(春)

家の中だけでは場所が足りなくなるので、外壁に簡単な屋根を架けて雨をしのぎ、そこに蚕を放した。後には庭にテントや鉄骨の簡易建物を建てて蚕室とした。

蚕を外に出すのは五齡であるから、無茶苦茶忙しい時期である。明けの月光など作業の場への絶好の照明である。

## 郭公や桑刈られ野路あからさま

読みⅡかっこうや くわかられのじ あからさま

季語Ⅱかっこう(夏)

昭和二十年代には桑取りは葉っぱだけを摘み取る方法と、枝ごと切り取る方法が混在し、前の句のように、屋外に蚕座(槽)を作つて飼う場合は枝ごと切った。切られた後の桑畑は桑の台だけが残った裸の状態になる。

長男泰元

## バラの卓子も少年期クオレ読む

読みⅡばらのたくし こもしょうねんき くおれよむ

季語Ⅱバラ(夏)

このクオレは後に同じ本を私も読んだ。イタリアを舞台の少年群像物語クオレは戦前戦中に流行つたらしいが、その後読まれなくなったし、その名を聞きもしなくなった。本国イタリアでもそのあまりに国粹主義的内容が時代に合わず読まれていないという。

## 上簇の灯を煌々と風冷ゆる

読みⅡじょうぞくの ひをこうこうと かぜひえる

季語Ⅱバラ(夏)

### 季語Ⅱ冷ゆ(秋)

蚕は幼虫時代は密集しているが、十分桑を喰って塾蚕、いわゆる「ひきた」状態になると繭の作りどころを求めて放浪を始める。放浪しなくても喰った桑の枝やその辺の隙間に繭を作りたがる。繭を作る前に排泄するので、その排せつ物で周辺や隣人(隣虫?)の作った繭を汚す。従って、ひきたら直ちに繭を作る座である「もず」に移す。この作業が上簇である。これには手早く、かつ大量の柔らかい芋虫を傷つけないように扱う素早くも優しい手指による熟練の技が必要で、作業は風が冷える夜中にかかる事も当たり前であった。

もずは繭を作るに最適環境であるから蚕は安心してそこに繭を作り始める。人間としても密集して繭を作ってくれるので後が楽である。この句の時代の繭は藁をアコーディオン状に織った藁もずであったと思う。

昭和三十年代になるとボール紙で作った回転もずが一般的になった。これは、ひきると繭のサイズに合った隙間を求めて放浪し、基本的に重力に逆らう方向に移動したがる性質をうまく利用してボール紙の小部屋にまんべんなく蚕を落ち着かせて繭を作らせ、その繭をもずから外すのも楽な絶妙な仕掛けで、養蚕の最後まで使われた。

回転簇は、分解して仕舞われており、いざ鎌倉を前に組み立てた。回転簇の組み立ては子供の重要な仕事であった。組立てが間に合わず、手待ちが生じたりすると子供でも容赦ない罵声が飛ぶ。

## 桑刈られドツと麦秋農婦の葬

読みⅡくわかられ どつとばくしゅう のうふのそつ

### 季語Ⅱ麦秋(夏)

葬式と火事は待たなしである。不祥事を起こして村から付きあいを拒否された場合でも、葬式と火事は村人に手伝って貰えた。これを称して村八分と言った。

村八分とは関係なくても、やつと春蚕が終わり休む間もなく麦刈り、さらにそのまま田植えに雪崩れ込むという無茶苦茶に忙しい農繁期の真つ只

中であるが、死人が出たら、村中総出で農作業は休んで葬式を出さなければならぬ。

## つばめ<sup>カヘ</sup>孵る土間の蚕やぐら盛食期

読みⅡつばめかえる どまのこやぐら せいしよくき

### 季語Ⅱつばめ(夏)

五齢になった蚕の上簇数日前は喰い盛りと言って、猛烈な勢いで桑を喰う、この時期の蚕に十分な桑を喰わせるとそれだけしっかりとした繭を作ってくれる。蚕飼いの正念場である。

## 御嶽吉沢のK尼新家一泊、後恋に生きたと聞く美しい尼弟子

《この謎めいた前書きは、まず、新家に泊った尼さんの後日談なので、この句集を編むに当たって書いた物で、作句の時の物ではないようである。御嶽吉沢は多分地名で、御嶽昇仙峡の入り口にある集落である吉沢の事であろう。地図で見るとさして大きくない集落に幾つかの寺があるのでなにか特別なところなのかもしれない。》

## 尼弟子の指の哀艶蜜柑むく

読みⅡあまでしの ゆびのあいえん みかんむく

### 季語Ⅱ蜜柑(冬)

## 冬磧葬列照られ遠ざかる



読みⅡふゆかわら そうれつてられ とうざかる

季語Ⅱ冬（冬）

磧は河原の意味。坂井には河原は無いので、塩川か釜無川べりの葬式風景であろう。

## 耕衣つけし盥に喜雨の侏儒おどる

読みⅡのらぎつけし たらいにきうの じゅじゅおどる

季語Ⅱ喜雨（夏）

手錬れの句である。

## 厨裏棲み古り母と親し墓

読みⅡくりやうら すみふりははと したしがま

季語Ⅱ蝦蟇（夏）

母Ⅱ姑 はつ 妙織大姉  
はつはいつも和服を着ていた。野良に出る事は生涯なく「大家のおかみさん」で通した。

榮助とはつはよく衝突していたが、俳句の中では黙榮は、はつに優しい。ゆりの叔母にあたり、はつの妹かつの連れ合い新津耕平が榮助の小学校の先生だった、というのが縁で深澤榮助は志村家に婿入りした。

昭和三十六年、六十九歳で他界。



この写真は、家の裏庭でサフランの花を摘んでいるところである。サフランは可憐な紫色の花で、花を摘んだあと、大変な手間をかけてめしべだけを取って乾燥させ、甲府の生薬屋に売って現金収入とした。しかし、昭和も下ると、生薬の産地管理が煩くなり、場違いな品は引き取って貰えなくなった。自家用では、サフランを料理に使う事は無く、数本の乾燥めしべにお湯を差し、金赤色のお茶にして飲んだ。砂糖を少し入れたサフランは風邪をひいた時の定番だった。この名残のサフランは今でもほぼ同じ場所にある。

はつのエピソッドで、もう一つ。

前の畑でゴールデンデリシャスを作っていたので、収穫期には家まで買いに来る人には売っていたが、処理しきれない分はすりおろしてジュースにした。これにクエン酸を加えればアルコール発酵しないらしいが、はつはそんなことお構いなしに発酵させてリング酒にしてしまっていた。リング酒は秘蔵酒として、榮助が飲んだり、客に振舞ったりした。

好事魔多し、誰かの密告があって、はつは警察署に引張られた。警察でも泰然とおかみさんを通し、妻えばあさんだ、と感心されて帰ってきた。

クエン酸投入を約束させられたというが、そんな事をはつが守ったかどうか。

残念ながら、そして当たり前であるが、私は、はつのリング酒を飲んだ事がない。後にフランスでシードルに出会った時、この話を思い出したものである。シードルは口当たりの良い発泡酒である。

## 秋となる夜氣そくくと水盗む

読み〓あきとなる やきそくそくと みずぬすむ

季語〓秋(秋)

そくく〓忙しくせわしく。盗む〓人にきづかれぬように。

晩酌を欠かさなかった榮助、夜中に酔い覚めの水を飲んだであろう。実際酔い覚めの水は旨いと常々言っていた。

『酔い覚めの水千両と値が決まり〓三笑亭可楽・うどん屋』

水は台所に水甕があった。十リットルのバケツ十杯分くらいはある大きな甕で、井戸から水を運んで水甕を満たしておくのは小学生の役であった。始め両手で一つのバケツを支えていたものが、いつのまにか両手に一つづつ下げて運ぶようになっていった。はつは「おばあちゃんだって、昔はほうやって運んだだよ」と言った。

## 泰元の遠足について八月富士見高原に遊ぶ日野敏子碑

《私の時にはすでにそういう習慣は無かったが、泰元の小学生時代は父兄が遠足や更に修学旅行にまで同行した。勿論同行したのは父兄全員では無く、PTAの役員か何かであったであろう。子供達の安全確保が名目であったであろうが、楽しみの旅行と云う意味もあったであろう。》

## 尾の花かげ真実囁く敏子の碑

読み〓おのはなかげ まことささやく としこのひ

季語〓尾の花(秋)

日野敏子なる人物は、女流の俳人であろうという推定は出来るが、詳しい事は判らない。女性人名辞典、文人辞典等に当たっても判らなかった。従ってキーワードの「真実囁く」の意味が判らない。足利幕府の縁者にも日野敏子という女性はいない。

蛇笏が句碑を立てても名前が忘れ去られたら俺びしさしか無いと、弟子が蛇笏句碑を立てるのをなかなか許さなかったというが、判る気がする。

## 行く夏の雨がすすろに葦咲けり

読み〓ゆくなつの あめがすすろに にらさけり

季語〓夏(夏)、葦咲く、葦の花(夏) 〓季重ね

漫ろ 宛ての無いさま。

何か深い意味を含むのか思わせぶりであるが、ちよつと判りかねる。

## 田水涸れ新月青き夕焼中

読み〓たみずかれ しんげつあおき ゆうやけちゆう

季語〓夕焼(夏)、新月(秋) 〓季違い

田水涸れとは穏やかではない。涸れと言っているからには人為的に落としたのではなく、用水路が渇水で涸れてしまったのであろう。

こうなると明日の天気を約束する夕焼も恨めしいだけである。夕焼の中の新月が青いという様相も凄みがある。この先どうなるのか。

# 忌の簾きびしく静かなる残暑

読み||いみのれん きびしくしずかなる ざんしょ  
季語||残暑(秋)

泰元受持 田中先生の病氣見舞正楽寺へ 二句

《正楽寺は茅ヶ岳の麓の村。おそらくバスで行ったのであろう。》

# 草を干す秋暑静かに山館

読み||くさをほす しゅうしよしずかに やまやかた  
季語||秋暑(秋)

# 虫干しの衣美しく乙女病む

読み||むしほしの ころもうつくしく おとめやむ  
季語||虫干し(夏)

私は田中先生にも縁無く、どんな先生だったのかどんな乙女だったのか全く分からない。しかし、この句で見る限り、鄙には稀な才媛美女のように思える。父兄がお見舞いに行くというのであるから一寸重い、長い病であったであろう。

榮助は元教師と云う事から、この頃、小学校、中学校の先生とは個人的にも親しく付き合っていた。

或る童子の死を悼む二句

# 奥津城の露に褪せゆくわらべ碗

読み||おくつきの つゆにあせゆく わらべわん  
季語||露(夏)

わらべ碗は、子供の墓の供物碗。前書きが「死を悼む」、であるから碗はまだ真新しい筈である。黙栄はこの碗は、この場所で露に褪せていくのであると言う感慨で見ている。

妙な誉め方であるが、黙栄の野辺送りの句には良い句が多い。

# 露万斛之<sup>シ</sup><sup>タ</sup>使負いゆかむ

憶良の歌に寄せる  
読み||つゆばんこく したべのつかい おいゆかむ

季語の「露」は涙も含むであろう。万斛は涙が何石も流れるの意味。

憶良の歌とは万葉集巻の五

『若ければ道行き知らじ<sup>まひ</sup>賄はせむ<sup>したへ</sup>下方の使負ひて通らせ』

幼くして死んだ子供を悼む歌で、『こんなに幼いのだからあの世に向かう道も知らないだろう、お礼(お供物)はあげるから、あの世からの使いよ、この子を背負って行ってやってくれ』之<sup>シ</sup>之<sup>タ</sup>使負は万葉仮名。

黙栄は憶良としているが、万葉集編者は、伝憶良として作風が似ているので憶良の歌に並べたとしている。

黙栄の野辺送りの句の常套で、二句。ペアであるが、この二句は両方とも高い調子である。



この句は、ゆりのいう「難しい事を言つて脅かす」黙榮俳句の典型であろう。初めて見た時、いったいどこから手を付けて良いやら皆目わからなかった。こんな句を作られたら、後で解説を作ろうとしている者にとつては大変である。

## 端居すや来し方星に似てはるか

読みⅡはしいすや こしかたほしに にてはるか

季語Ⅱ端居(夏)

端居は縁側など家の端の部分に居て涼んでいる事。黙榮三十八歳、随分と大仰かつ老生した句である。

## 有明の冴ゆる金環秋蚕飼う

読みⅡありあけの さゆるきんかん あきごかう

季語Ⅱ秋蚕(秋)

有明の空に金環があると言う句である。金環と言っているのはこれは金星ではない。また、金環食の太陽が東の空にある状態を、有明の金環冴ゆる、とは言わないであろう。

調べてみると、昭和二七年八月六日の明け方に皆既月食があった。前後の句から見てこの句が、その時詠まれたとしても無理はないし、例年通りであると、蚕は五齢にかかった頃で、暗いうちに起きての桑取りに追われる時期である。ともあれ、有明の空の金環はきれいだったであろうと思う。

## 新家 おとり様逝く二句



昭和十八年夏、富三氏出征。

前列中央が富三、その向かって右が、おとりさん。

後列右端、榮助。その左、泰元を抱いたゆり、はつ。

ゆりは、はつより小柄だったので何か台に載っている。

後列左から二人目、白い浴衣姿、好平。

富三氏は甲府四十九連隊に召集され、南方に展開。終戦をジャワで迎え、昭和二十三年帰還。そして昭和二十四年満恵さんを娶る。翌年長男保則君誕生。

## 夜葬りの火に露光る曼珠沙華

読みⅡよはぶりの ひにつゆひかる まんじゅしゃげ

季語Ⅱ曼珠沙華(秋)

葬り、葬に「り」の送り仮名がしてあって、葬に振り仮名がない。できたら二字で読みたい。色々調べたが「はぶり」と読むのが最適であろう。

葬式が夜であるのは、別に特殊な宗教的な理由があったのではない。曼珠沙華の頃であるから、秋蚕の喰い盛りか何かで無茶苦茶忙しい時期であつ

たのである。土葬だったこの時代、葬式と火事は待った無しであるからなんとか人手が工面できる夜中の葬式になったのである。

前の方に麦秋の頃の葬式の句があり、夏にはどこかの童が逝った。

## 秋梅雨の霽れ間の星や柩出す

読み||あきづゆのはれまのほしや ひつぎだす

季語||秋梅雨(秋)

秋梅雨(あきつゆ)は季語であるが、秋梅雨という季語として歳時記に載っていない。霽れは晴れと同じであるが、わざわざこんな字をあてたのは霽れは雨が上がって奇麗に晴れるという意味が強いからであろう。

## 地球儀の海の半球秋灯澄む

読み||ちきゆうぎの うみのはんきゆう あきひすむ

季語||秋灯(秋)

ここに詠まれている地球儀の事は覚えている。泰元用に買った直径十五センチ位の可愛い物だった。地球儀の海の半球とは、南太平洋を中心とした半球で、地球儀で見ると陸はほとんどなく、海の色は青一色である。

## 夕陽燃ゆ峽の白膠木おくて刈り

読み||ゆうひもゆ はぎまのぬるで おくてかり

季語||晩稲(おくて)刈る(秋)

漢字が多い句なのに、季語の晩稲をおくてとわざわざ平仮名にして隠したような句である。実際さらっと読んだのでは、「難しい言葉で脅かす」黙榮マジックにかかってしまい、おくてが赤く紅葉したヌルデに懸かる形容詞か何かかと思ってしまう。「山本||やんもと」田んぼの上の土手にヌルデ

が群生しており、秋にはきれいに紅葉した。

「刈るほどに山風のたつ晩稲かな／蛇笏」

## 享けこぼす麦蒔き祝ぎの酒熱く

読み||うけこぼす むぎまきほぎの さけあつく

季語||麦蒔き(冬)

享けるは、神に供物を捧げるの意味、また音から受けるの意味もある。従って享けこぼすというこの句は神々との酒宴の情景である。

麦蒔きの句が何句かあるが、夏からずっと続いた農作業が、秋蚕、稲刈り、麦蒔きと終わると大団円を迎え、所謂農閑期に入る。

榮助は、熱爛というより、飛び切り爛が好みだった。

## 冬に入る桑の葉もろき帰省道

読み||ふゆにいる くわのはもろき きせいみち

季語||冬に入る(冬)

帰省道と言っているのは、甲府からボロ電こと山梨交通電鉄の電車で古市場駅まで行き、そこから落合村塚原まで歩いているのである。現在は桃と李、それに柿の大果物産地であるが、当時は養蚕地帯であった。

秋蚕で取り残され、一霜喰った桑の葉は一寸触れただけでパリりと落ちる。それは心地よい位のもろさである。

## 風呂熱く稲架をかわかす風つる

読み||ふるあつく はさをかわかす かぜつる

季語||稲架(秋)

榮助はぬるい湯が好きだった。何につけ対照的な人だった榮助の兄の忠良は他の人には手も入れられない熱湯風呂を好んだ。その榮助が熱めの風呂に入って外を吹きつる風、季節からいつて北風の音を聞きながら。山本田んぼの稲架うし、に架けた稲の事に思いを寄せている。

## 夜もたぎる味噌豆の釜ちゝる老ゆ

読みよもたぎる みそまめのかま ちちいおゆ

季語 味噌炊き(冬)

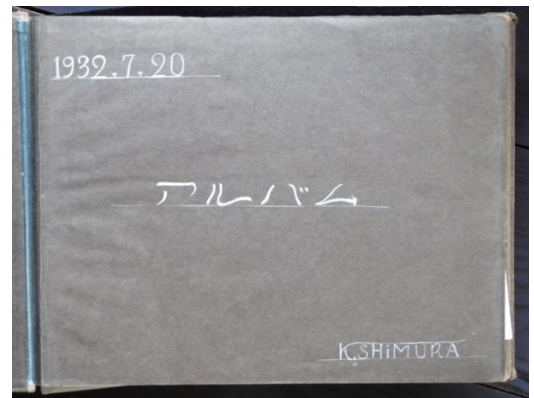
味噌を作るために、大豆を炊いているのである。好平は竈の火を焚くのが好きだった。九十歳位まで鶏を飼ったが、その餌は、文献調査して購入した鶏用飼料や貝の粉や魚粉やなんやかやに数々の野菜や葉っぱを刻んで入れ、さらにそれを竈で煮て与えていた。購入飼料は土間でセメントを混ぜるよう捏ね回したが、子供の頃相方を命じられた。



好平 昭和三十年頃  
六十代半ば。

甲府商業学校のごく初期の生徒で、同窓会は送り迎え付きで席は壇上だった。

元銀行員、終生算盤と帳簿、それに煮豆と鶏を愛した。酒が飲めない甘党だった。長岩と号し、比悪も詠んだ。



好平のデザイン・制作によるアルバムの表紙。白いエナメルで洒落たロゴを使って描いている。

西暦の日付け、ローマ字の K.SHIMURA が新鮮である。

1932年7月には、ロサンゼルス・オリンピックが開かれ、馬術の西武一中佐や競泳陣が活躍した。



同アルバムにある好平の写真(左)。大きな集合写真を切り取ったような体裁である。甲府商業学校入学時か?。だとしたら明治三七年(一九〇三年)である。我家で一番古い写真である。

鶏は平飼いではなく、一羽づつのケージで飼い、文字通りの闇魔帳に産卵記録を取り、一定の成績以下の鶏は廃鶏として業者に下げ渡した。家まで卵を買いに来る人への値付けも適宜ではなく、直近の甲府の市場卸売価格を新聞で調べて売っていた。万事元銀行員だったのである。

うなう影たちまち長し冬至暮る

読み||うなうかげ たちまちながし どうじくる

季語||冬至(冬)

太陽は標高二千五百メートル級の山(総称して西山)に沈むので、関東平野の平地ほど長い影を引くことはないが、そのかわり、あつという間に暮れてしまう。

まさに

『山國の虚空日わたる冬至かな/蛇笏』の世界である。

うなう、は畝を切るで、耕して柔らかくしてある地面に何かを植える為に、鍬を使って土を掘って溝を切って行く作業を云う。鍬というのは華奢な道具なので、振り回すものではない。テレビや映画で百姓が鍬を頭の上まで振り上げたりするがとんでもない姿である。

ねむる山襷に沈みて人棲む灯

読み||ねむるやま ひだにしずみて ひとすむひ

季語||眠る山、山眠る(冬)

いかにも、雲母派らしい句である。飯田龍太の句と言っても通りそう、と言ったら身内の臍屑が過ぎるというものであるうか。

近隣の訃をつぎぐに年暮るゝ

読み||きんりんを ふにつぎつぎに としくるる

季語||年暮るる(冬)

確かに葬式の多かった年のようである。

榮助は長生きであったので最晩年はほとんど全ての友に先立たれた。友や知り合いの訃報を聞き続けるのは彼にとって悲しい事であった。死の数年前からは一切の年賀状のやりとりもやめてしまった。

冬深しみな低く点く農家の灯

読み||ふゆふかし みなひくくつく のうかのひ

季語||冬深し(冬)

昭和二十七年は、記録的に冬が早く、東京で十一月半ばに初氷が張った。その寒い冬の風景である。

二句前の句に似ている。ともに飯田龍太の代表作

『大寒の戸もかくれなき故郷/龍太』

を連想させるが、龍太の句は昭和三十四年発表なので、黙榮句の方が先である。

晩年の榮助は、酔った上での俳句談議で、若い頃黙榮として直接師と仰いだ蛇笏の句より、龍太の句を高く評価していた。龍太に自分の感覚を被せていたのかもしれない。

悪酔いすると、自分が山櫓に出入りし始めた頃は中学生だった龍太を羨れ呼ばわりする事もあったが。

山の娘群るゝ廉賣台も年つまる

読み||やまのこむるる れんばいだいも としつまる

季語||年つまる(冬)

葦崎の洋品店の店先の光景か。この時代の葦崎の商店街の羽振りは凄く「売ってやる」と云う態度で、「穂坂や藤井の者が葦崎で買物をするのは地

元氏としての義務」位に考えていた、と後々までゆりが怒っていた。  
山の娘とは随分な言い方である。黙榮の悪筆では山の狼と見えてどきつ  
とした。

## かえり花水翳カケいつか冷え深く

読み||かえりはな みずかげいつか ひえふかく

季語||冷え、冷ゆ(秋)

返り咲きの花が水に映っている。何の花か判らないが、本来春に咲く花  
であろう。その返り咲きの花がひっそりと水面に映っている。

昭和二十七年 終り